

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520337

研究課題名(和文)小説の書き出しの研究：スペイン文学におけるトポス生成と変容過程の考察

研究課題名(英文)Research on Fictional Beginning: the Becoming of the Topos and the Process of its Transformation in Spanish Literature

研究代表者

大楠 栄三(OGUSU, EIZO)

明治大学・法学部・准教授

研究者番号：80315853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：小説の書き出し 読者をフィクションの世界へ引き込むための術が凝縮されている場において、その作品が生まれた時代を生きた人々の審美的・性的感性が読み取れることを、19世紀末のスペイン小説を例に明らかにした。

科学万能主義が席卷した19世紀にギリシア・ローマの古典への憧憬、タイトルやサブタイトル、献辞といった書物の始まりを活用した書き手からの読みの指令、冒頭1行目から主人公を固有名で導入する手法、当時の社会で女性がおかれた立場への賛否を反映した主人公のモデル(家庭の天使/新しい女; 強い女/弱い男)の登場、フェミニズムの萌芽と連関した、信用ならない男の一人称語りの広まり、といったもの。

研究成果の概要(英文)：This investigation has proved, taking the 19th end of Spain's case as an example, that it's able to read the aesthetic and sexual sensibility of people who lived in the society of the concrete age, in the beginning of fiction, where the arts of persuasion to immerse that reader in the fictional world has been highly concentrated.

For instance, 1) the adoration of the Greece-Roman classics in the century when the scientism had overflowed in Europe, 2) the first utilization of the book's beginning as the titles, subtitles, and dedication in order to determine how to read the novel, 3) the technique of introducing hero by his name from the first opening line, 4) the appearance of the models of characters as "domestic angel/new woman" and "strong female/weak male", that depended on the approval or disapproval to the female's social situation, 5) the predominance of the discourse of first person, that is narrated by the untrustworthily male narrator, related to the sign of feminism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学

キーワード：小説の書き出し スペイン小説 エミリア・パルド＝バサン 女性作家 19世紀末 フェミニズム 社会階級

1. 研究開始当初の背景

“incipit”という日本語になりにくい言葉があるが、演劇や映画といった表象芸術における「幕開き」や「オープニング」の重要性に疑問を呈する者はいないだろう。では、文学作品、中でも、小説という本質的に修辭的な芸術——なぜなら小説家は読者を彼らが住む現実世界から想像世界へ引きずり込まなければならぬから——においての「幕開き」である「書き出し」には、どれほどの重要性があるのか。

書き出しが、「何を書くか」ではなく、「どう書くか」という技巧上の諸要素をさまざまな形で絡ませ、凝縮させた場であることは間違いない。さらに、読者を想像世界へ没入させるための術が、〈書き手〉だけに限られる事象でないことも明らかだ。と言うのも、その説得術には、〈読み手〉の好みや想像力といった感性が関与するはずだからだ。つまり、「書き出し」に潜む種々の技巧は、必然的に、一定の〈時代〉の一定の〈社会〉に属する個人と集団の審美的感性による拘束を受けることになるのでないか。

(1) 報告者はこれまで、書き出しの〈歴史性〉と〈社会性〉に着目し、人びとの感性が劇的な変容を遂げ、それに連動して新メディアの普及と発明が相次いだ19世紀後半のヨーロッパ、とくに1880年代のスペイン小説に焦点を当てて考察を進めてきた。その結果、スペイン・リアリズムを代表する小説、とくにエミリア・パルド＝バサン(1851-1921)の初期小説(1879-1889)において顕著に、一つの書き出しの「トポス」——ここでは、「技巧上の諸要素が定型化したもの」という意味で使用する——から、別の新しいトポスが生成する過程を観察することができた。

(2) 小説を創作する側からの、書き出しの重要性を指摘する声は枚挙にいとまがない。にもかかわらず、スペイン文学はもとより広くヨーロッパ文学、ひいては日本文学においてすら、小説の「書き出し」を歴史的に考察した研究が皆無というのが研究を進める動機となった。

本研究は、スペイン小説の「書き出し」に焦点をしばり、19世紀末葉に生じたトポス転回の歴史的意義を明らかにするものである。ただし、書き出しが歴史的かつ社会的な現象である以上、この転回は同時期の欧米に誕生した「新しい読者」、その想像力の帰結と捉えることができるだろう。新しい読者は、写真や印象主義絵画を楽しんだ後、19世紀のヨーロッパを風靡した「パノラマ」装置に退屈

を覚えはじめ、発明間近の映画の観客となる人びとであり、彼らはその後、キュービズムの美を受け入れることになる。すなわち、本研究を通して、そのような感性の変容が表象ジャンルを超え、いかに生じたのかを、歴史的な脈から立証できると考えた。

2. 研究の目的

(1) トポスAの考察

1880年代前半のスペイン小説において遍在して観察される書き出しの一定の形式(便宜的に「トポスA」と呼ぶ)のまさに「始まり」を、スペイン文学史上に探ることを目的とする。もちろん、書き出しが、技巧上の諸要素が多層的に連関した場である以上、さかのぼる起源は一つとは限らない。

(2) トポスBの変容

「トポスA」を構成する各要素が変容することによって1880年代中葉に出現したかと思うと、たちまち遍在した「新しい」書き出し(「トポスB」と呼ぶことにする)が、世紀末を挟む芸術・文学のさまざまな「新潮流」が噴出し、「映画」という新メディアが普及しはじめた時代にあつて、どのように変容を見せたのか。この変容過程を考察する。

この第二の考察によって、われわれは「近代」という時代が小説の書き出しに落とした影—テキストの「曖昧性」や「懐疑性」を暗示する事象を確認できるはずである。

3. 研究の方法

上記のクエスチョンへの回答を、ヨーロッパ文学の伝統と同時代のヨーロッパ小説、視覚芸術・装置といった文化史的コンテクスト、さらに女性の自立といった社会史的側面から探るため、女性作家エミリア・パルド＝バサン(1851-1921)の成熟期の作品に焦点を絞り時系列にそつて考察を進めた。その上で、彼女と同時代のスペイン作家たち、ペレス＝ガルドス(1843-1920)、クラリン(1852-1901)、ペレーダ(1833-1906)の小説の分析結果を横軸において比較参照するという方法を取つた。

パルド＝バサンに焦点を当てたのは次の4つの理由による。

(1) 定期的な小説執筆

代表作と評される 1886 年の小説第 5 作『ウリョーアの館』以後も、第 7 作『日射病』(1889)、第 8 作『郷愁』(1889)、第 9 作『あるキリスト教徒の女』(1890)、第 10 作『試練』(1890)…… 第 13 作『独り者の日記』(1896) にいたるまでコンスタントに良質の小説を著しているため、彼女の作品をたどることで、スペイン小説における書き出しの変容を時系列に沿って概観できる。

(2) 古典の伝統と同時代のヨーロッパ

女性であるがため、大学にも行けず文壇との付き合いも皆無という社会的状況にあって、ギリシア・ローマの古典とスペイン小説の修辭的伝統を独習していたこと、裕福な貴族であったため頻繁に外遊し同時代のヨーロッパ(とくにフランスの作家たち)と密接に接触していたこと、さらに、そこで吸収したものをスペインで発表しつつ同時代のスペイン作家たちとの交際を広げていき大学で教鞭をとるにいたったこと——これらの背景から伺い知ることができるように、時代と共に大きく成長し変容を遂げていった作家であるから。

(3) 文化史的考察

(2)でも触れたが、裕福な貴族であったことから、同時代のヨーロッパで流行したさまざまな科学的装置と接する機会が多く、それらについて率直な感想を新聞・雑誌に数多く寄せている。そして、彼女の生誕 150 周年(2001 年)を契機にそれらの記事の刊行が相次いでいるため、入手可能な資料が比較的豊富である。

(4) フェミニズム的言説

新聞・雑誌において、スペイン社会における女性の性差別の問題を提起し、女性の自立と教育実現に向け改革を訴え、さらに、そのための図書出版に努めるといった、最初の実践的フェミニストであったこと。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

①ギリシア・ローマの古典への傾倒

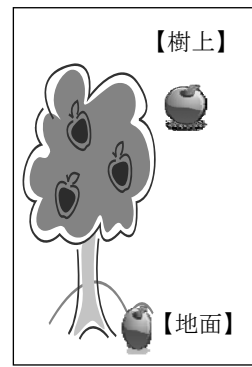
科学万能主義が席卷した観のある 19 世紀後半において、古典への憧れなど時代錯誤だと一般的に見なされている。

しかし、たとえば第 6 作『母なる自然』(1887)の書き出し、降雨の描写は、上下二段に区切られ、上方と下方のパートが交互に描き出される描写となっており、そこに視線の連続性

『母なる自然』



『ダフニスとクロエー』



を看取できない。つまり、同時代の風景描写に共通して見受けられる印象主義・自然主義的な感性を認めることができないのだ。むしろ、この書き出しは、『ダフニスとクロエー』(3 世紀)を初めとするギリシア古典の中で規範化されたトポス「悦楽境」"locus amoenus"のレトリックに基盤をおく描写となっている。そして、パルド＝バサンはみずから編集長を務めた地方誌に、スペイン語に訳出されたばかりの『ダフニスとクロエー』を絶賛する書評を書いている。

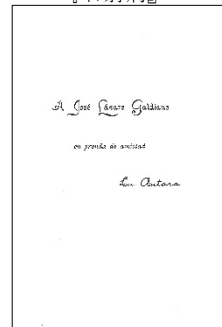
第 9 作『あるキリスト教の女』(1890)の最終行——書き出しと連関する特権的な場——に同じくギリシア・ローマのレトリックが見いだせることから、ヨーロッパにおける「現代」の始まりと「古典」の伝統とのつながりは疑いえない。つまり、価値相対主義が自明となる現代の出発点の考察において、ギリシアやローマという絶対的価値の再興を軽視すべきでないことを示唆した。

②書物としての始まり(ペリテキスト)の重要性

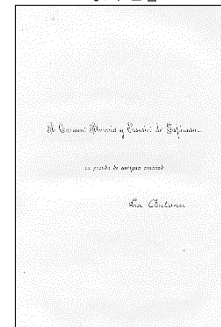
作品の「タイトル」、「サブタイトル」、「献辞」といった書物としての「始まり」を自由に決める権威を獲得した小説家において、こうしたペリテキストが当時の読者に対する語りの戦略上、極めて重要な一翼を担うことを明らかにした。

たとえば、第 7 作『日射病』において、内

『日射病』



『郷愁』



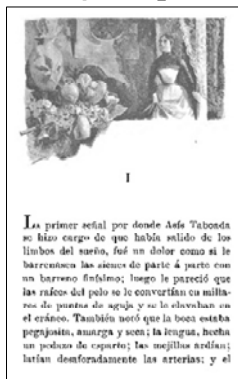
容からズレたタイトル、サブタイトル「愛の物語」、献辞「ホセ・ラサロ・ガルディアーノへ 友情の証しとして 作者」は、作者が当時の読者に向けて投げかけた「読み」の指令：「スキャンダラスな恋愛小説として読みなさい」と解することができる。

同様に、第8作『郷愁』においても、サブタイトル「愛の物語」と、本作を一人の女性に捧げるという「献辞」(ペリテクスト)がこれまで軽視されてきた。しかし、たとえば、同じサブタイトルを共有する前作『日射病』と同じ〈三角関係の物語〉であることと、主要な作中人物が〈未亡人〉だという共通性を考慮したとき、〈連作〉をとおして当時のスペイン都市社会に見受けられた2つのタイプの女性〈新しい女〉と〈家庭の天使〉を描き分けようとした作者の企てが顕在化してくる。

③書き出しのトポスBの確立と解釈

第7作『日射病』(1889)で、初期小説8作品(1879-1889)中初めて、主人公が冒頭一行目から〈固有名〉で導入され、その人物の描写が展開するという「書き出し」が登場する。そして、第8作『郷愁』(1889)でも同じ書き出しが踏襲される。

『日射病』



『郷愁』



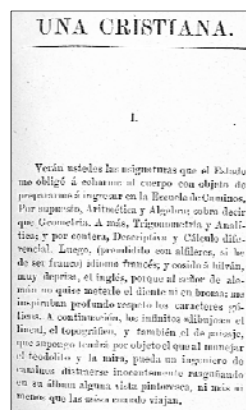
前作では、書き出しから次第に男性性を顕示していく語り手の権威(「命名」行為)からのヒロインの解放として。

後作では、書き出し一行目に母親を固有名で名指しすることによって、「献辞」に記された現実のブルジョア夫人と、「書き出し」の虚構のブルジョア夫人という2人のブルジョワ未亡人の固有名が併記されることになり、〈ブルジョア夫人〉が前景化された作品となる。

④書き出しのトポスBの変容

第9作『あるキリスト教徒の女』(1890)以後、書き出しから主人公の「わたし」が語り手として登場する、いわゆる「一人称小説」

『あるキリスト教徒の女』



が大半となる。

ただし、その「わたし」の固有名に関しては、トポスAと同じで、物語が展開するなか他の作中人物が遂行した(と「わたし」が知覚する)発話の中で読み手に明かされることになる。

⑤相反する文学モデル〈家庭の天使／新しい女〉、〈強い女／弱い男〉の登場

第7作『日射病』では、ヒロインみずからが男性に告白することによって、女のセクシュアリティを顕在化させ、結果、みずからの手で幸せを獲得するという〈新しい女〉が描かれている。

逆に、第8作『郷愁』の書き出しは、19世紀末のマドリードにおける都市ブルジョワジーの実態を示す指標に満ちており、この点に着目したとき、〈未亡人と一人息子〉からなるブルジョワジー一家において、息子の将来を案じ右往左往する〈家庭の天使〉としての母親の物語が見えてくる。つまり、これら2作がスペイン文学における相対する二つの女性モデルの登場と併存を示唆しているのである。

また、第9作『あるキリスト教徒の女』(1890)以後の作品の主人公＝語り手が、例外なく、意気地のない信用ならない男性、〈弱い男〉となり、逆に、登場する女性の作中人物が精神的に〈強い女〉となっていくことを突きとめた。

⑥フェミニズム的言説と社会階層

これまで小説解釈に取り込まれてこなかった、パルド＝バサンの「スペインの女性」(1889)といったフェミニズム的言説が、作者の社会階層意識を確認する上で貴重な資料であること、たとえば、先の評論からは作者の際立ったブルジョワ女性嫌いが見出せることを明らかにした。

(2) 国内外における位置づけとインパクト

①国内

研究成果を毎年東京スペイン語文学研究会ならびに日本イスパニヤ学会大会で口頭発表し、学会誌や紀要において公刊することによってスペイン 19 世紀小説への再評価を促し、現時点で以下 2 作品の翻訳出版が決定・進行中である：

ベニート・ペレス＝ガルドス『ドニャ・ペルフェクタ：完璧夫人』大楠栄三訳，現代企画室。

エミリア・パルド＝バサン『ウリョーアの館』大楠栄三訳，現代企画室。

②国外

19 世紀スペイン文学の国際学会 "Sociedad de Literatura Española del Siglo XIX" (19 世紀スペイン文学会) の副会長 Marisa Luisa Sotelo Vázquez (バルセロナ大学教授，報告者が勤務する明治大学に招聘され 2013 年 6 月に来日，2 講演を実施) のご高配をたまわり，第 7 回大会 (バルセロナ大学，2014 年 10 月 22 日～24 日開催) での研究発表が決まった。

③国外

本研究を進め，論文等を送付するなかで，“Casa-Museo Emilia Pardo Bazán” (ガリシア王立アカデミー／エミリア・パルド＝バサン生家・博物館) の所長 Xulia Santiso にこれまでの研究成果を認めていただき，学芸員の面々をはじめ，さまざまな協力関係が生まれた。たとえば，日西交流 400 周年事業の一環として，スペイン，ア・コルーニャ市で開催される国際映画祭 "(S8) mostra de cinema periférico" (2014 年 6 月 4 日～6 月 8 日) のディレクターの紹介を受け，このイベント向けに，スペイン北西部のガリシア地方を主な舞台とした，パルド＝バサンの初期小説 5 編の「書き出し」(スペイン語＋日本語) と「あらすじ」をまとめた小冊子を発行するはこびとなった。

(3) 今後の展望

①セクシャリティの研究

書き出しに凝縮して現れる，1890 年以後の作品における〈語りの急変〉の要因を，作家が目指した小説美学の変容のみに求めるのは無理がある。むしろ，19 世紀末のスペイン社会における「男性性」や「女性性」といったセクシャリティが大きく影響したのではないか。こうした仮説のもと，現実世界の流動化した「男性性」と「女性性」が，〈書く行為〉にどのように作用したのかを考察しな

ければならないと考えている。

②男性作家と女性作家の影響関係

19 世紀末から 20 世紀初頭のスペイン小説をリードしたベニート・ペレス＝ガルドス (1843-1920) とエミリア・パルド＝バサン (1851-1921) の二人の場合，作家としての，あるいは男性と女性としての交際が，互いの作品に及ぼした影響関係を検討しなければ，〈語りの急変〉の大きな要因を見逃してしまうのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 大楠栄三 「男性一人称語りのストラテジー—パルド＝バサン『あるキリスト教徒の女』と『試練』(1890) — (前篇)」，明治大学教養論集，査読無し，第 489 号，2013，pp. 1-98，<http://hdl.handle.net/10291/16480>
- ② 大楠栄三 「誰の〈愛の物語〉？—パルド＝バサン『郷愁』(1889) の始まりと『スペインの女性』—」，明治大学人文科学研究紀要，査読有り，第 71 冊，2012，pp. 113-175，<http://hdl.handle.net/10291/16422>
- ③ 大楠栄三 「〈新しい女〉の語り—パルド＝バサン『日射病』(1889) の始まり—」，明治大学教養論集，査読無し，第 466 号，2011，pp. 17-76，<http://hdl.handle.net/10291/14846>
- ④ 大楠栄三 「書き出し風景描写のレトリック—パルド＝バサン『母なる自然』(1887) — (後篇)」，国際関係・比較文化研究 (静岡県立大学)，査読無し，第 8 巻 2 号，2010，pp. 247-292，<http://usr.u-shizuoka-ken.ac.jp/kn/AA11845283201003001040.pdf>
- ⑤ 大楠栄三 「書き出し風景描写のレトリック—パルド＝バサン『母なる自然』(1887) — (前篇)」，国際関係・比較文化研究 (静岡県立大学)，査読無し，第 8 巻 1 号，2009，pp. 71-99，<http://usr.u-shizuoka-ken.ac.jp/kn/AA11845283200909001050.pdf>

[学会発表] (計 8 件)

- ① 大楠栄三 “Un personaje de *Morriña* de Emilia Pardo Bazán: ¿imagen ficticia o histórica?” (邦題「エミリア・パルド＝バサン『郷愁』の作中人物：虚構の存在も

しくは歴史上の存在？」), *Sociedad de Literatura Española del Siglo XIX*第7回大会, 2014年10月22日~24日, バルセロナ大学(スペイン・バルセロナ), 発表確定。

- ② 大楠栄三「「ベニート・ペレス＝ガルドス＝《ヒヨコ豆作家》？ 『ドニャ・ペルフェクタ』＝《傾向小説》？」, 東京スペイン語文学研究会第166回, 2014年05月17日, 東京大学駒場。
- ③ 大楠栄三「一人称語りのジェンダー・ストラテジー—パルド＝バサン『キリスト教徒の女』と『試練』(1890)—」, 日本イスパニヤ学会第58回大会, 2012年10月13日, 愛知県立大学。
- ④ 大楠栄三「屈しない女たち—『キリスト教徒の女』と『試練』の身勝手な男の語りをとおして」, 東京スペイン語文学研究会第155回, 2012年07月21日, 東京大学駒場。
- ⑤ 大楠栄三「誰の〈愛の物語〉？—パルド＝バサン『郷愁』(1889)の始まりと『スペインの女性』—」, 日本イスパニヤ学会第57回大会, 2011年10月08日, 駒沢大学。
- ⑥ 大楠栄三「ブルジョア女へのあてこすり—パルド＝バサン『郷愁』(1889)の書き出しと「スペインの女」をとおして」, 東京スペイン語文学研究会第149回, 2011年07月16日, 東京大学駒場。
- ⑦ 大楠栄三「風景描写のレトリック—パルド＝バサン『母なる自然』(1887)の書き出し—」, 日本イスパニヤ学会第55回大会, 2009年10月10日, 静岡県立大学。
- ⑧ 大楠栄三「風景描写のレトリック—パルド＝バサン『母なる自然』(1887)の書き出し—」, 東京スペイン語文学研究会第139回, 2009年09月19日, 東京大学駒場。

[図書] (計3件)

- ① ベニート・ペレス＝ガルドス, 大楠栄三訳, 現代企画室, 『ドニャ・ペルフェクタ: 完璧夫人』, 2014, 印刷中。
- ② 大楠栄三, 現代企画室, 「『ドニャ・ペルフェクタ』解説」, 2014, 印刷中。
- ③ 大楠栄三, Casa-Museo Emilia Pardo Bazán + (S8) *mostra de cinema periférico, Las novelas de Emilia Pardo Bazán con escenarios gallegos* (邦題『ガリシア地方を舞台としたエミリア・パルド＝バサンの小説』), 2014, 42ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大楠 栄三 (OGUSU Eizo)

明治大学・法学部・准教授

研究者番号: 80315853